

「サービス付高齢者住宅」～終の棲家について  
思うこと

5～6年前、自宅の近所に、「高齢者向け優良賃貸住宅（平成23年にこの制度は廃止され『サービス付き高齢者住宅』に一本化。計画時のままの看板が未だに出ている）」ができた。運営者は医療法人。母のお友達が入居している。住み慣れた街で、ご自宅からも近く。80代後半の母と同年のお友達は、はつらつと生活されている。

父がいた頃、「夫婦で入れる部屋が空いている」と入居を誘われたそうだが、自宅があるので断ったと母が言っていた。自宅があってもそのままにして、家賃（その他の費用）を払えば誰でも入れる。ちょっと不思議な感じがするが、自宅にいて受けられない「サービス」や「安心」のための費用を払うということなのか。

住宅街の真ん中にあるので、買い物が不便だと入居者の方々がおっしゃっていると聞いた。「サービス付」は、どこまでなのか気にかかる場所である。夜中に救急搬送された方のご家族が呼ばれたという話も聞いた。こちらの住宅の関係者は付き添わないのか。買い物などはどうなっているのか。何が含まれていて、何がダメなのか。

施設としては、バリアフリーなのは当然のこととして、各居室には緊急対応ボタンが備えられているようだ。間取り図を見ると、個室には、キッチン、トイレ、ユニットバス、洗濯機置き場が配置され、「自活」が基本、「使い勝手のよさそうな賃貸住宅」といった感じである。

入居者同士の交流ができるスペースもあり、お茶やお菓子をもち寄って交流したり、世話好きの方が、家事が苦手な方に手作りのお総菜などを届けたりということもあるようだ。

元気で動ける、家事が苦でない、一人でも寂しくない、でも、見守ってほしい…というならば、自由（に見える）「サ高住」は、適しているのではないかと思う。今満室で、入居待ちの方がいらっしやるとのことである。

自活が不可能になり介護が必要になった時、「その先も空席待ち」の可能性も否定できないとなると、入居時に、「いつになるかわからない、その先」を考えておくことも必要なのではないかと感じる。

また、最近、このような住宅が多くなり、中には悪質な「サなし高住」と揶揄される物件も増えていて、関係機関には相談が後を絶たないと聞く。

近くには全室個室の介護付き有料老人ホームもあり、こちらには何度か伺ったことがあるが、個室（専有部分）はトイレや洗面スペース、クローゼットのすべてを含めて8畳ほどであろうか。広い一戸建てに住んでいた方は、入居に当たり、ほとんどの物を処分された。どんな思いで作業をされたのかと思うと、心が痛む。

さらに、メインの玄関は施錠され、食事や入浴、外出などさまざまなことに自由度は低い。

手厚いケアがある分、入居金などを見ると、ケタが違うのではないかと思うくらいの金額である。

終の棲家を考える時、経済的な負担がまず頭に浮かぶ。特に「お一人様」の場合、行く末がどんどん不安になる。懐事情で行く先が決まるのは、今風の言い方をすれば、リアル「地獄の沙汰も金次第」か。

自分の身の回りのことは自分ででき、元気で自由に動けるように老いて行ければいいが、そうとも限らない。

人生のラストまで「健康で文化的な最低限度の生活」を営むには、自身の心身の状況だけでなく、経済的な条件、棲家の選び方や運までも影響してくるようである。